

定窯の紹介

中国のやきものの歴史は古く、原始的な青磁は紀元前1600年には存在したといわれており、唐三彩、宋の青磁・白磁、明の青花（染付）など、各時代を象徴するやきものが作られています。宋代には、五大名窯といわれる、汝窯、官窯、哥窯、鈞窯と共に、定窯はその一つに数えられています。

定窯では、唐代末頃から青磁の生産が始まり、やがて上質な素地を用いて白磁が生み出されています。定窯白磁は、素地が純白で硬く焼き締まり、刻花や印花による蓮華・草花・水鳥など精巧な模様で飾られています。掛けられた釉薬はかすかな黄色を呈し象牙に似た高貴な気品を帯び、中国陶磁の最高峰とまで称されています。本展では、清代の乾隆帝に寵愛されたと伝えられる故宮博物院所蔵の白磁孩児枕のレプリカを展示していますので、当時の素晴らしい技術を垣間見ることができます。

元代に、コバルトを顔料とした絵付けを施した青花が生産されると、彩色による陶磁器が主流となり、定窯白磁の生産は姿を消し、やがて歴史に埋もれていきました。

1920～1930年代、葉麟趾（叶麟趾）の発見により、定窯の復興の基礎を築かれ、1941年に岡山県出身の世界的な陶磁研究者・小山富士夫が定窯を調査することで、定窯陶磁器が日本および国際学術界で再評価されることになりました。現在は伝統を生かした新しい感覚の作品作りが行われています。

| 中国 | | 日本 | |
|---|--------|--|--|
| 紀元前1600年頃「原始青磁」が登場 周代に青磁技術が進化。祭祀器が登場 | 殷代・周代 | 縄文時代 (紀元前1万4千年 ～紀元前300年) | 縄文土器 |
| 紀元前2世紀～3世紀:本格的な「青磁」が完成 後漢末期に陶磁器大量生産が開始。海外輸出 | 漢代 | 弥生時代 (紀元前300年 ～200年) | 弥生土器 |
| 青磁が発展。仏教の伝来に伴い、仏像や装飾品も作られる。初期の白磁も出現 | 三国～南北朝 | 古墳時代 (200年～592年) | 土師器、埴輪 4世紀末：陶邑(大阪)にて陶器(須恵器)生産の開始 |
| 唐三彩(多色釉陶)・青磁(越州窯)・白磁(邢窯)の時代 | 隋代・唐代 | 飛鳥時代 (592年～710年) 奈良時代 (710年～794年) 平安時代 (794年～1185年) | 8世紀：猿投窯にて灰釉陶器 三彩陶器、緑釉陶器 |
| シルクロードを通じて中東や欧州に伝播 | 五代十国 | 鎌倉時代 (1185年～1333年) | 12世紀：瀬戸窯にて古瀬戸(施釉陶器)生産開始 備前、越前、常滑、信楽、丹波の各窯始まる(日本六古窯) |
| 五大名窯の萌芽期(汝窯・官窯・哥窯・定窯・鈞窯) 五大名窯が発展。陶磁器の黄金期。簡素で上品な造形美。 | 宋代 | 室町時代 (1334年～1573年) | 15世紀：備前にて不老山東口窯跡など大型窯が稼働 |
| 青花磁器(景德镇)に本格化ペルシャの影響を受けた文様登場。 海外輸出が旺盛 | 元代 | 安土桃山時代 (1573年～1603年) | 16世紀：京都・楽焼 九州で連房式登窯稼働；唐津焼 茶の湯の流行；茶道具生産盛ん「黄瀬戸」「志野」 |
| 景德镇の隆盛。官窯制度の整備。景德镇が官窯の中心地に 青花の技術が頂点に(「宣徳青花」) 五彩(赤・緑・黄など多色の上絵付)が発展 | 明代 | 江戸時代 (1603年～1867年) | 17世紀：美濃で連房式登窯稼働「織部」 1616年：有田開窯、磁器生産開始「伊万里」 17世紀半ば：色絵陶器「仁清」 1659年：肥前磁器欧州への輸出始まる。 1823年：備前に連房式登窯導入 |
| 康熙年間(1662～1722)：琺瑯彩(洋風の絵付技法)が 宮廷で発展 雍正年間(1723～1735)：淡雅な色調の「粉彩」が好まれる 乾隆年間(1736～1795)：極彩色装飾が隆盛 | 清代 | 明治時代 (1868年～1912年) | 備前にて土管生産開始 備前にて耐火煉瓦生産開始 19世紀～20世紀：珈琲碗皿など輸出用洋食器 生産盛ん |
| 20世紀初頭：景德镇の伝統技術が衰退するが、1950年代以降に 国営工場で復興 | 近現代 | 大正時代 (1912年～1926年) | 1930年～40年頃：美濃や備前で桃山陶芸復興 |
| | | 昭和時代 (1926年～1989年) | 1956年：金重陶陽、人間国宝認定 |
| | | 平成時代 (1989年～2019年) | 2000年頃：現代陶芸の大変革 |
| 現代アートとしての陶磁器や伝統技法の継承・革新が進む | | 令和時代 (2019年～現在) | 2024年：備前・現代陶芸ピエンナーレ2024開催 |



天下無双、定窯の現代陶芸

定窯展に関する情報は
右のQRコードでもご覧いただけます



共催 岡山県備前市
中華人民共和国河北省保定市曲陽県
一般財団法人備前市文化芸術振興財団

期間 2025年7月12日～10月31日
場所 備前市美術館



庞永辉

パンヨンファイ

1973年6月生まれ。河北省曲陽陳氏定窯磁器有限公司の芸術監督を務め、正高級工芸美術師。中国工芸美術協会副理事長、中国五大名窯専門委員会副主任を兼任。



白釉刻花瓶

1300℃の高温で一度焼成。その後彫刻。模様は伝統的な刀法を主に用い、自由闊達で明快な印象を与えます。蓮の花、茎、葉が徐々に広がるように配され、上下に余白を残すことで、伝統美学の現代的な表現を十分に示しています。



陳偉

チェン ウェイ

1984年6月生まれ。河北省曲陽陳氏定窯磁器有限公司の若手デザイナー。型にはまらず、様々な分野の長所を取り入れた革新芸術を追求している。



天上飘下红雨来

定窯伝統の刻彫花技法を基に発展させたもので、高温で発色する色材と定窯の陶土を一定の比率で混ぜて泥漿(でいしょう)とし、素地の凹状文様に塗り込んでから表面を平らに仕上げるといふ、定窯が新たに創出した釉下装飾の技法です。



白耀亮

バイ ヤオリャン

1976年11月生まれ。河北省工芸美術大師、工芸美術業界芸術大師、河北大学特任教授、中国工芸美術協会理事。2017年10月、曲陽県大宋秋鴻定磁文化創意有限公司を創立。



福满人间

中国の伝統的な人物である「鍾馗納福(しょうき・ふくを招く)」が描かれています。釉薬にはマット釉(つや消し釉)が使用され、施釉後に研磨処理を施すことで、互いに引き立て合う立体的な効果が生み出されています。



闫玉伟

イェン ユーウェイ

1980年8月生まれ。曲陽県街泥坊陶芸スタジオ芸術監督。河北省工芸美術大師。定窯粗磁の創始者として、白磁を基盤に定窯粗磁生産を復活させ、陶磁器業界の空白を埋めた。



百态观音之九

土の紐状と板状の素材を組み合わせることで、大胆な筆致の水墨画を思わせるような勢いと自由さを表現しています。現代彫刻との融合点を模索する試みがなされており、古典と現代の対話を感じさせる作品です。



薛兴临

シュエ シンリン

1973年11月生まれ。現在、弘伝定窯創始者、曲陽定窯研究所所長。2012年以降、9大釉薬系統を体系化し、50種以上の新釉薬を開発、定窯復興の基盤を築いた。



秘色青黄釉睡莲瓶

定窯の白釉、白釉の巻き唐草文様、そして白磁を創作の出発点とし、希少な秘色の青黄釉と睡蓮の造形を融合させています。定窯が再び蘇ることを象徴しており、新時代における伝統の継承と革新の魅力を表現しています。



韩江潮

ハン ジャンチャオ

1987年4月生まれ。父・韓春傑に定窯焼成技術を学ぶ。定窯窯系の開発においては、伝統を継承し古法を厳守。最も素朴で伝統的な磁器制作技術を持っている。



定窑牡丹纹执壶

壺身には牡丹文様が装飾されており、龍の頭をかたどった注ぎ口と獅子のつまみの蓋が呼応しています。牡丹文様の刻画は精緻で、宋代の工匠技術と茶・酒文化の優雅さを見事に体現しています。



庞晓江

パンシャオジャン

1987年5月生まれ。中国工芸美術学会会員、河北省工芸美術大家、保定市無形文化遺産代表的伝承者。多くの若者に定磁技術を伝授。定磁の普及と発展に積極的に貢献。



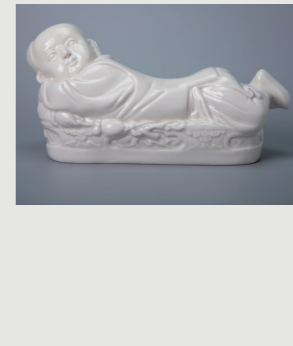
白釉杯口尊

北宋定窯の代表的な暖白釉を表面に用いており、釉質は脂のように凝縮され滑らかで、釉面は僅かに象牙色がかかっています。伝統的な蓮紋の様式と誇張された造形言語の間で絶妙なバランスを保っており、漢・唐時代の重厚な風格を感じさせます。



河北省曲陽陳氏定窯磁器有限公司

1992年に設立され、国家級無形文化遺産「定窯焼製技術」を継承した国家博物館指定生産工場として認定。

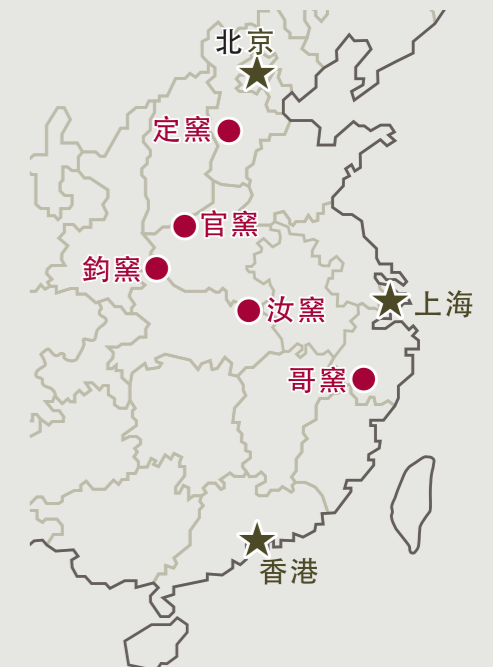


孩儿枕

宋代の様式を模したもので、原品は故宮博物院に所蔵。定窯の孩児枕は、中国五大名窯の中でも定窯を代表する作品であり、その技術の精妙さと職人の巧みな発想は極めて珍しく、中国陶磁史における古典的傑作と称されています。

定窯の発祥の場所は、現在の河北省保定市曲陽県で、北京から約240kmの場所にあります(※中国は市の下に県がある行政構造です)。曲陽県の人口は65.4万人で、定窯・石彫を中心とした陶磁器と彫刻の街といっても過言はないでしょう。歴代の陶芸師や石彫職人、工芸美術大師が多く排出され、現代では、定窯技術を継承する若手作家・芸術家の活動も盛んです。定窯の窯の形状は、当時の北方窯業の特徴を反映した「マントウ窯」(饅頭窯)構造が主流でした。日本人もよく知る景德鎮などの中国南部地域では、傾斜地に築かれた細長い「龍窯」が一般的です。饅頭窯は小型で温度管理が容易、石炭燃焼に適した構造であり、定窯の特徴である「象牙色の白磁」や「薄手の成形」を可能にしたとも言われています。2008年、中国国務院は定窯磁器の焼成技術を国の無形文化遺産に登録しました。また、現在13の保存状態の良い定窯磁器遺跡があり、考古学のおよび科学的研究価値が高いとされています。

五大名窯地図



定窯遺跡の碑



饅頭窯の一例



保存活動を行っている定窯遺跡